

中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅲ）*

久世敏雄 後藤宗理¹⁾ 宮沢秀次¹⁾
二宮克美¹⁾ 池田博和¹⁾ 伊藤義美¹⁾
石黒敬子²⁾

I 問題意識

中学生や高校生の社会的態度は、どのように形成されるものであろうか。この社会的態度の発達過程に関する研究は、青年心理研究ではほとんど見当たらない現状である。

そこで、われわれは、中学生や高校生の社会的態度は保守的の態度、革新的の態度および大衆社会的の態度により、ある程度表わすことができると考え、これらの各態度がどのような実態を示すのか、また、中学あるいは高校の段階において、これらの各態度は変容するの否かについて検討をした。しかし、ここで捉えてきた各社会的態度の分析は、被調査者の年1回の資料（久世・速水、1974）あるいは、年1回の資料を2回にわたって得た資料（久世・速水、1975）に基づいている。この前者の資料収集の方法は、従来の青年心理研究の方法を踏しゅうしたものである。このことは、青年心理研究においては、その多くの研究が横断的資料によるものであることを意味する。

中学生や高校生の社会的態度の発達過程の分析に際しては、同一被調査者の縦断的資料に基づいて分析することが必要である。われわれの社会的態度に関する研究は、この種のデータに基づいて検討する。現在、この研究は継続中であり、ここでは、同一被調査者による4年間にわたる資料をもとに、中学生や高校生の社会的態度の発達過程の分析を意図する。すなわち、本研究は、中学生

や高校生の各社会的態度は変容するものなのか否か、変容するとすれば、それはどの社会的態度なのか、さらに社会的態度が変容したりしなかったりする要因は何かを明らかにすることを目的とする。

われわれは、研究の出発点において、中学生や高校生の各社会的態度を捉える際に、教育学部田浦研究室での価値意識に関する調査と重複しないよう、相互に調整しながら、質問紙を作成した。われわれの社会的態度に関する調査資料と田浦研究室の価値意識に関する調査資料との相互関連や、さらに基本的には、これらの質問紙調査で得られた情報が中学生や高校生の社会的態度の一面を表わしているかの検討も必要である。

また、中学生や高校生の各社会的態度の変容にどのような要因が関与しているかを明らかにする際、質問紙調査だけに依存することが果して効果的であるかについて考慮することも必要である。中学生や高校生の各社会的態度は、年齢の経過とともに徐々に変容するものなのか、あるいは、社会的態度を変容させる外的な要因があるかについて検討するための最善の方法は、被調査者と面接することであろう。したがって、われわれは、各社会的態度の変容の要因やわれわれの捉えた社会的態度の内容に関して詳細に検討するため、若干の被調査者と面接をする。中学生や高校生の各社会的態度に関して得られた分析結果は、この面接調査により補足される。この報告をするのが、第2の目的となる。

II 方法

1. 縦断的調査資料について

縦断的調査資料は、同一被調査者に年1回、計4回調査したものである。被調査者は、教育学部附属中学生および高校生である。現在までに入手した調査資料のうち、ここで報告するデータは、中学1年から高校I年まで、および中学3年から高校Ⅲ年まで、同一調査を4回実施したグループのものであり、調査は、昭和47年度から昭和51年度にかけて実施した。被調査者は、表1のとおり

* この研究は、東北大学宮川知彰教授による総合研究「中学校・高等学校生徒の人格形成と学習活動に関する教育心理学的研究」（昭和51年度）の分担研究である。なお、本研究の資料分析のための計算は、名古屋大学大型計算機センター FACOM230-75 によった。

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期課程）教育心理学専攻

2) 中京女子大学

中学生・高校生の社会的態度に関する研究 (Ⅲ)

である。Aグループとは、中学1年から高校I年までの縦断的資料を分析するグループをいい、Bグループとは中学3年から高校Ⅲ年までの資料を分析するグループをいう。

表1 被調査者の内訳

グループ	男子	女子
A	51名	44名
B	38名	38名

ここでの報告は、附属中学生および高校生の資料分析に基づいており、サンプルに歪みがないかという危惧がある。この妥当性に関しては、すでに報告したとおり(久世・速水, 1974), 附属中学・高校生の分析結果は、名古屋市近郊都市の中学生および高校生のそれとほぼ同様である。また、われわれは同一被調査者に同じ調査を年に1回ずつ実施しているが、中学生や高校生の社会的態度は、比較的短期間においてすら変動する可能性があるかの、いわば信頼性の問題がある。この点に関しては、名古屋市内某中学校での調査結果の一部を表2に掲げておく。この分析結果によれば、中学生の社会的態度は、1週間の間隔では比較的安定した資料が得られている。なお、社会的態度に関する質問紙作成の手続きや調査質問紙については、すでに報告済みであるが、このうち社会的態度に関する質問紙は、末尾に掲げておく。

表2 2回の各社会的態度得点の平均、標準偏差および相関 (名古屋市内中学2年)

性別	社会的態度	回数	平均	標準偏差	相関	
男子	保守的	1回目	37.24	6.05	0.865***	
		2回目	37.73	6.75		
	革新的	1回目	48.48	5.44	0.791***	
		2回目	48.02	5.79		
(90)	大衆社会的	1回目	35.36	5.98	0.871***	
		2回目	35.71	6.05		
女子	保守的	1回目	35.41	5.34	0.823***	
		2回目	35.13	5.68		
	革新的	1回目	46.81	4.87	0.805***	
		2回目	46.80	5.06		
	(97)	大衆社会的	1回目	34.84	5.25	0.819***
			2回目	34.06	5.13	

注: ()内の数字はサンプル数である。なお、表中*印は相関係数の有意性が $P < .05$, **印は $P < .01$, ***印は $P < .001$ であることを示す。以下*, **, ***印に関しては同様である。

2. 面接調査資料について

被面接者は、教育学部附属高校Ⅲ年生の中から選択した。被面接者は、中学2年から高校Ⅱ年までの4回の調

査をすべて受けており、社会的態度に関して、比較的変動している者および変動していない者計10名である。

面接者は、教育心理学科大学院生計7名であり、面接は、昭和52年1月下旬に附属高校で行なった。

面接調査は、質問紙調査資料と面接資料による調査結果の照合、大人の社会に対する見方や関与の仕方、および社会認識の形成と変容を中心に行なった。なお、面接

質問3 哲学者が日本の将来の目標についてテレビで話しています。「私たちは、三つの道の一つを選ばなければならない。」

- a 私たちは、日本の伝統的な愛国心をもっと強化すべきである。(T)
- b 私たちは、日本が世界の国々と仲よくできる新しい愛国心を育てるべきである。(M)
- c 私たちは、自分たちの生きている時代にもはや適さない国家的な愛国心を信じない。(I)

質問6 古いものをどのように取り扱うかについて、三つの意見があります。

- a 古いものは、長い時間をかけて、多くの人びとに吟味され、取捨選択され歴史の試練に耐えて生き残ったものだから、良いものであるにちがいない。(T)
- b 古いものは、何でもすべて打ちこわせ。破壊によって、次に何が生まれても、今より悪くなることはない。(I)
- c 古いものは、確かに歴史の試練を経て生き残った良いものがある。しかし、だからすべて古いものが良いものであるということにはならない。時代の流れにつれて、現代にそぐわないものも多い。そういうものは改良していかなければならない。(M)

質問13 次の中で最も大切だと思う道徳はどれですか。

- a 個人の権利の尊重。(I)
- b 親孝行。恩返し。(T)
- c 生命の尊重。(M)
- d 自由と平等の尊重。(I)
- e 伝統と慣習の尊重。(T)
- f 友情。(M)

注: 表中、(T)はその項目が伝統的価値志向であることを、(M)は中庸的価値志向であることを、(I)は革新的価値志向であることを示す。

結果は、被面接者の承諾を得てテープをとり、それを分析した。

また、田浦研究室による価値意識の質問紙調査の中、われわれが利用した質問紙は、保守的、革新的および大衆社会的態度と内容的にはほぼ同じ3項目を選び出している。質問は、前頁のとおりであり、被面接者が高校Ⅲ年時の資料を利用した。

Ⅲ 結 果

中学生および高校生の社会的態度の発達過程を明らかにするために、われわれは、質問紙による縦断的調査と面接による調査とから資料を得てきた。そこで、以下、縦断的調査の結果と面接調査の結果について、順次述べることにする。

1. 縦断的調査資料の分析

われわれは、中学1年から高校1年までの4年間、および、中学3年から高校Ⅲ年までの4年間の同一個人のデータをもとに、以下の視点から社会的態度の発達の様相を明らかにする。すなわち、まず、態度別にみた4年間の平均、相関、および変動量について、その全体の様相を明らかにする。次に、4年間のうち、最大の変動を示した時期を個人ごとに求め、その時期がいつであるかということを手がかりにして、個人の発達過程を考える。

なお、ここでは、男女別に、AグループとBグループの結果を関連させながら検討していくことにする。

(1) 各社会的態度得点の平均、標準偏差および相関(男女別)

態度ごとに、4年間の平均値と調査時点間の相関とをまず求めた(表3~6)。そして、これらの結果を、態度別に、学年間の平均値の差および相関係数の有意性について、検定した。

まず、各社会的態度得点の平均について、全体の様相をみておく。表3および表4から明らかなように、AグループにおいてもBグループにおいても、男女を問わず革新的態度の態度得点は、ほかの2つの態度得点よりも高い傾向にある。つぎに、各態度ごとに、学年間の平均値を比較してみると、男子の場合、保守的態度は、Aグループでは(表3)、中学1年よりも中学2年において態度得点が高い($P < .05$)。また、表4から明らかなように、Bグループの結果によると、中学3年の態度得点と比較して、高校各学年の態度得点は有意に高い(いずれも $P < .01$)。

革新的態度は、Aグループでは(表3)、中学3年および高校1年の態度得点は、中学1年よりも低く(いずれも $P < .05$)、また、Bグループでは(表4)、高校

表3 4回の各社会的態度得点の平均および標準偏差 (Aグループ)

性別	社会的態度	平均ならびに標準偏差	学年				
			中 1	中 2	中 3	高 I	
男	保 守 的	M	36.41	34.92	35.22	36.06	
		S D	4.15	5.38	4.14	4.65	
	革 新 的	M	47.92	46.76	46.51	46.53	
		S D	3.75	4.74	4.55	4.72	
子	大衆社会的	M	32.45	34.24	34.80	35.02	
		S D	5.23	6.78	5.82	6.32	
女	保 守 的	M	36.23	34.80	34.20	33.75	
		S D	5.60	5.16	4.98	5.11	
	革 新 的	M	46.70	46.48	45.68	45.16	
		S D	3.91	4.59	5.05	4.63	
	子	大衆社会的	M	33.43	33.59	34.34	35.50
			S D	5.93	4.82	5.66	6.26

表4 4回の各社会的態度得点の平均および標準偏差 (Bグループ)

性別	社会的態度	平均ならびに標準偏差	学年				
			中 3	高 I	高 II	高 III	
男	保 守 的	M	32.11	34.66	35.95	36.00	
		S D	5.82	6.31	5.76	7.19	
	革 新 的	M	49.13	47.58	45.66	45.29	
		S D	4.63	4.92	6.73	6.37	
子	大衆社会的	M	31.58	34.26	36.45	35.21	
		S D	7.22	6.31	9.14	6.79	
女	保 守 的	M	30.95	32.08	31.55	32.45	
		S D	4.14	5.95	4.15	5.39	
	革 新 的	M	47.47	46.92	46.87	47.29	
		S D	5.75	5.97	5.11	6.14	
	子	大衆社会的	M	32.47	33.53	35.11	34.29
			S D	6.39	5.29	5.79	6.97

各学年の態度得点は、中学3年よりも低い(それぞれ、 $P < .05$, $P < .05$, $P < .01$)。さらに、高校3年間のうちでは、高校Ⅲ年は高校I年よりも態度得点が高い($P < .05$)。

一方、大衆社会的態度は、Aグループでは(表3)、中学3年および高校I年は中学1年よりも得点が高く(それぞれ $P < .05$, $P < .01$)、また、Bグループでは(表4)、中学3年の得点に比べて、高校各学年のそれは、有意に高い(いずれも $P < .01$)。

女子の場合をみると、保守的態度については、Aグループでは(表3)、中学3年や高校I年は中学1年よりも得点の低くなる傾向があり(それぞれ $P < .05$, $P < .01$)、Bグループ(表4)では、高校3年間の得点差は、ほとんどみられない。このように、得点差の小さい傾向は、革新的態度についても見出すことができる(表3、

中学生・高校生の社会的態度に関する研究 (Ⅲ)

表4)。すなわち、A・B両グループとも、すべての学年間の平均値について有意な差はみられない。

一方、大衆社会的態度については、学年が進むにつれて得点が高くなる傾向がある(表3、表4)。詳しくみると、Aグループでは(表3)、高校Ⅰ年の得点は中学1年および2年よりも高く(いずれも $P < .05$)、Bグループでは(表4)、高校Ⅱ年および高校Ⅲ年の得点が中学3年よりも高い(それぞれ $P < .01$, $P < .05$)。また、高校の3年間を比較してみると、Ⅰ年よりもⅡ年の得点の低いことがわかる($P < .01$)。

さいごに、表5、表6の結果に基づいて、学年間の相関係数を態度別に検討する。

まず、男子の場合をみると、保守的態度の学年間相関は、かなり低く、Aグループでは(表5)、となりあった学年の間で有意な相関がみられるだけである。一方、Bグループでは(表6)、中学3年および高校Ⅰ年と高校Ⅱ年との間で有意な相関がみられないが、ほかの組み合わせについては、有意な相関が得られている(いずれ

表5 各社会的態度の4回の相関 (Aグループ)

社会的態度	学年	中1	中2	中3	高Ⅰ
保守的	中1		.584***	.455**	.519***
	中2	.438**		.758***	.728***
	中3	.173	.380**		.663***
	高Ⅰ	.199	.217	.577***	
革新的	中1		.543***	.300*	.212
	中2	.341*		.635***	.598***
	中3	.296*	.106		.620***
	高Ⅰ	.434**	.398**	.672***	
大衆社会的	中1		.626***	.703***	.620***
	中2	.413**		.779***	.669***
	中3	.294*	.634***		.761***
	高Ⅰ	.349*	.624***	.638***	

斜線の上段は女子、下段は男子。表6も同様である。

表6 各社会的態度の4回の相関 (Bグループ)

社会的態度	学年	中3	高Ⅰ	高Ⅱ	高Ⅲ
保守的	中3		.671***	.520***	.523***
	高Ⅰ	.577***		.556***	.556***
	高Ⅱ	.174	.271		.684***
	高Ⅲ	.344*	.598***	.367*	
革新的	中3		.778***	.627***	.538***
	高Ⅰ	.589***		.707***	.582***
	高Ⅱ	-.069	-.251		.703***
	高Ⅲ	-.025	.394*	.133	
大衆社会的	中3		.718***	.700***	.797***
	高Ⅰ	.650***		.857***	.696***
	高Ⅱ	.664***	.613***		.806***
	高Ⅲ	.528***	.549***	.588***	

も $P < .001$, あるいは $P < .05$)。

革新的態度については、Aグループでは(表5)、中学2年と中学3年との間に有意な関係がみられない以外は、すべての組み合わせにおいて、有意な相関が得られている。しかし、Bグループでは(表6)、有意な相関

表7 各社会的態度の変動量の分布と平均および標準偏差 (Aグループ:男子)

社会的態度	学年 変動量	学年					
		1-2	1-3	1-Ⅰ	2-3	2-Ⅰ	3-Ⅰ
保守的	0~5	34	40	34	38	37	45
	6~10	15	7	12	11	8	4
	11~15	2	3	5	2	3	2
	16~20	0	1	0	0	3	0
	21~52	0	0	0	0	0	0
	M	4.20	4.06	4.20	4.41	4.43	3.16
S D	3.34	3.65	3.71	3.12	4.62	2.70	
革新的	0~5	38	39	37	37	42	44
	6~10	11	9	12	9	7	6
	11~15	2	2	2	4	0	1
	16~20	0	1	0	0	2	0
	21~52	0	0	0	1	0	0
	M	4.18	3.84	3.75	4.37	3.22	2.84
S D	2.88	3.44	2.98	4.42	4.08	2.45	
大衆社会的	0~5	36	34	25	40	36	40
	6~10	11	10	18	6	10	8
	11~15	2	5	8	4	5	3
	16~20	1	1	0	1	0	0
	21~52	1	1	0	0	0	0
	M	5.27	5.26	5.90	3.75	4.63	3.94
S D	4.40	4.61	3.95	4.01	3.41	3.37	

表8 各社会的態度の変動量の分布と平均および標準偏差 (Aグループ:女子)

社会的態度	学年 変動量	学年					
		1-2	1-3	1-Ⅰ	2-3	2-Ⅰ	3-Ⅰ
保守的	0~5	34	28	33	38	37	35
	6~10	8	13	9	6	7	8
	11~15	1	2	0	0	0	1
	16~20	1	1	1	0	0	0
	21~52	0	0	1	0	0	0
	M	3.75	4.39	4.30	2.96	3.00	3.36
S D	3.50	3.96	3.93	2.02	2.53	2.46	
革新的	0~5	39	36	31	37	36	36
	6~10	4	4	9	6	8	7
	11~15	1	3	4	1	0	1
	16~20	0	1	0	0	0	0
	21~52	0	0	0	0	0	0
	M	3.27	3.98	4.18	3.25	3.59	3.30
S D	2.50	3.76	3.73	2.69	2.43	2.71	
大衆社会的	0~5	30	35	34	37	33	33
	6~10	13	7	7	7	9	10
	11~15	1	2	2	0	1	1
	16~20	0	0	0	0	1	0
	21~52	0	0	1	0	0	0
	M	3.84	3.36	3.98	2.98	3.91	3.39
S D	2.81	3.08	4.10	2.12	3.23	2.67	

は2つしかなく、全体に相関は低い。

一方、大衆社会的態度については、Aグループ、Bグループともすべての組み合わせについて、有意な相関がある。

女子の場合には、表5、表6から明らかなように、A

表9 各社会的態度の変動量の分布と平均および標準偏差

(Bグループ：男子)

社会的態度	学年 変動量	学年					
		3-I	3-II	3-III	I-II	I-III	II-III
保守的	0~5	27	25	23	29	26	27
	6~10	8	6	8	4	7	8
	11~15	2	4	3	2	4	1
	16~20	1	1	3	2	1	1
	21~52	0	2	1	1	0	1
	M	4.29	5.79	6.21	5.03	4.55	4.74
S D	4.41	6.05	5.78	5.45	4.27	5.66	
革新的	0~5	32	25	23	24	25	25
	6~10	5	6	8	9	8	8
	11~15	0	5	5	3	3	3
	16~20	1	0	0	1	2	0
	21~52	0	2	2	1	0	2
	M	3.34	6.11	6.00	6.03	4.97	5.68
S D	3.17	6.77	6.49	7.31	4.53	5.50	
大衆社会的	0~5	29	20	21	21	21	24
	6~10	5	11	9	12	13	11
	11~15	3	3	6	2	3	1
	16~20	0	3	2	3	1	0
	21~52	1	1	0	0	0	2
	M	4.74	6.55	6.26	5.50	4.90	5.24
S D	4.18	5.36	4.52	5.22	3.98	5.55	

表10 各社会的態度の変動量の分布と平均および標準偏差

(Bグループ：女子)

社会的態度	学年 変動量	学年					
		3-I	3-II	3-III	I-II	I-III	II-III
保守的	0~5	30	33	29	32	29	30
	6~10	7	3	8	4	7	8
	11~15	0	2	1	1	1	0
	16~20	1	0	0	1	1	0
	21~52	0	0	0	0	0	0
	M	3.13	3.13	4.19	3.74	4.16	3.26
S D	3.31	2.66	2.75	3.39	3.41	2.41	
革新的	0~5	30	29	28	32	29	31
	6~10	8	9	8	5	7	5
	11~15	0	0	1	1	2	2
	16~20	0	0	1	0	0	0
	21~52	0	0	0	0	0	0
	M	3.13	4.08	4.66	3.21	4.16	3.26
S D	2.71	2.46	3.34	2.88	3.67	3.04	
大衆社会的	0~5	30	31	28	36	30	33
	6~10	7	5	9	2	7	4
	11~15	0	1	1	0	0	0
	16~20	1	1	0	0	1	1
	21~52	0	0	0	0	0	0
	M	3.21	4.16	3.76	2.95	3.71	2.76
S D	3.32	3.49	2.75	1.67	3.47	3.17	

グループにおける革新的態度の中学1年と高校I年との間の相関を除く、3つの態度のすべての組み合わせについて、Aグループ、Bグループともに相関が有意である。

(2) 各社会的態度得点の変動量(男女別)

ここでは、前回同様(久世・速水, 1975), 変動量として、各社会的態度ごとに、各時点間の態度得点の差の絶対値を用いている。A・B両グループの変動量の平均と変動量の分布を示したのが、表7、表8、表9および表10である。

男子について、まずみることにしよう。平均値を比較すると、Aグループ(表7)では、保守的、革新的とも変動量が比較的小さく、大衆社会的態度も中学1年と中学2年、3年、高校I年の3学年との間の変動量は、やや大きい、それら以外の学年間の組み合わせの場合に

表11 各社会的態度の年間最大変動量の出現時期と変動量の分析

(Aグループ：男子)

社会的態度	出現時期 変動量	出現時期							計
		1-2	2-3	3-I	1-2 2-3	1-2 3-I	2-3 3-I	1-2 2-3 3-I	
保守的	0~5	6	12	4	1	1	2	1	27
	6~10	9	7	1	0	1	1	0	19
	11~52	1	1	2	1	0	0	0	5
	計	16	20	7	2	2	3	1	51
革新的	0~5	15	6	3	2	0	0	3	29
	6~10	7	5	1	1	0	2	0	16
	11~52	1	5	0	0	0	0	0	6
	計	23	16	4	3	0	2	3	51
大衆社会的	0~5	12	0	5	2	5	0	1	25
	6~10	8	5	4	1	0	0	0	18
	11~52	2	4	1	0	1	0	0	8
	計	22	9	10	3	6	0	1	51

表中1-2は、最大変動量が中学1年と中学2年との間にみられたことを意味する。以下2-3は中学2年と中学3年との間に、3-Iは中学3年と高校1年との間にみられたことを意味する。表12についても同様である。

表12 各社会的態度の年間最大変動量の出現時期と変動量の分布

(Aグループ：女子)

社会的態度	出現時期 変動量	出現時期							計
		1-2	2-3	3-I	1-2 2-3	1-2 3-I	2-3 3-I	1-2 2-3 3-I	
保守的	0~5	5	5	8	2	0	2	4	26
	6~10	6	4	4	1	0	0	0	15
	11~52	2	0	1	0	0	0	0	3
	計	13	9	13	3	0	2	4	44
革新的	0~5	7	8	7	1	2	1	2	28
	6~10	2	4	5	0	1	1	0	13
	11~52	1	1	1	0	0	0	0	3
	計	10	13	13	1	3	2	2	44
大衆社会的	0~5	5	3	8	2	1	3	1	23
	6~10	8	2	3	3	2	1	0	19
	11~52	1	0	1	0	0	0	0	2
	計	14	5	12	5	3	4	1	44

中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅲ）

は、変動量が比較的小さい。それに比べると、Bグループ（表9）では、全般に変動量がやや大きくなり、中学3年と高校Ⅱ年、Ⅲ年の間、および高校Ⅰ年と高校Ⅱ年との間での変動量が、やや目立っている。

つぎに、変動量の分布をみると、Aグループでは学年間のほとんどの組み合わせにおいて、10以下の者が90%以上を占めており、あまり大きな変動がみられない。しかし、Bグループの、中学3年と高校Ⅱ年および高校Ⅲ年との間、そして、高校Ⅰ年とⅡ年との間では、変動量が11以上の者は10ないし20%を占めている。

一方、女子の場合には、表8、表10から明らかなように、すべての態度について、変動量の平均は、5.0以下であり、変動の小さいことがわかる。この傾向は、変動量の分布についても同様であり、いずれの態度も、学年間のすべての組み合わせにおいて、変動量が10以下の者は90%以上を占めている。

これらの結果から、すべての態度について、男女を問わず、全体に変動は小さいといえよう。

(3) 各社会的態度得点の年間最大変動量（男女別）

個人ごとのデータを手がかりにして、社会的態度の発達過程を検討するために、まず、となり合った学年間の変動量のうち、最大のものを求めた。そして、年間の最大変動量を示す時期とその時点での変動量の分布をしらべた。

年間最大変動量を示した時期と、その時点での変動量の分布を示したのが、表11、表12、表13および表14である。

まず、男子の場合をみることにする（表11、表13）。いずれの態度についても、Aグループ、Bグループともある1つの時期に最大の変動量を示す単数型が多い。しかし、その時期は、態度によって様々である。Aグループでは（表11）、保守的・革新的態度は中学2年から中学3年の時期に、革新的および大衆社会的態度は、中学1年から中学2年の時期にというケースが、ほかの時期に比べてやや多くなっている。また、その際の変動量の大きさは、10以下の者が80%以上を占めており、1年間に変化する量は、あまり大きくない。

一方、Bグループでは（表13）、保守的および大衆社会的態度については、最大変動量が特定の時期に集中する傾向はみられない。また、革新的態度は、高校Ⅰ年から高校Ⅱ年の時期に最大変動量を示す者が、やや多い。しかし、変動量の大きさをみると、Aグループと同じように、10以下の者が80%前後を占めていて、全体の傾向は、最大変動量であっても、1年間の変動は、かなり小さいといえよう。

つぎに、女子の場合をみってみる（表12、表14）。全体

表13 各社会的態度の年間最大変動量の出現時期と変動量の分布

(Bグループ：男子)

社会的態度	出現時期 変動量	出現時期							計
		3-I	I-II	II-III	3-I I-II	3-I II-III	I-II II-III	3-I I-II II-III	
保守的	0~5	4	5	5	2	0	0	1	17
	6~10	6	4	4	0	0	0	0	14
	11~52	2	3	2	0	0	0	0	7
	計	12	12	11	2	0	0	1	38
革新的	0~5	6	5	2	2	0	3	1	19
	6~10	3	5	4	0	0	0	0	12
	11~52	0	4	3	0	0	0	0	7
	計	9	14	9	2	0	3	1	38
大衆社会的	0~5	5	2	2	0	2	1	2	14
	6~10	4	5	4	1	0	2	0	16
	11~52	2	3	2	0	1	0	0	8
	計	11	10	8	1	3	3	2	38

表中3-Iは、最大変動量が中学3年と高校Ⅰ年との間にみられたことを意味する。以下I-IIは高校Ⅰ年と高校Ⅱ年との間に、II-IIIは高校Ⅱ年と高校Ⅲ年との間にみられたことを意味する。表14についても同様である。

表14 各社会的態度の年間最大変動量の出現時期と変動量の分布

(Bグループ：女子)

社会的態度	出現時期 変動量	出現時期							計
		3-I	I-II	II-III	3-I I-II	3-I II-III	I-II II-III	3-I I-II II-III	
保守的	0~5	2	8	5	3	0	0	2	20
	6~10	6	2	8	0	0	0	0	16
	11~52	0	2	0	0	0	0	0	2
	計	8	12	13	3	0	0	2	38
革新的	0~5	5	8	4	0	4	1	0	22
	6~10	7	2	3	0	0	1	0	13
	11~52	0	1	2	0	0	0	0	3
	計	12	11	9	0	4	2	0	38
大衆社会的	0~5	5	11	3	2	1	0	2	24
	6~10	7	2	4	0	0	0	0	13
	11~52	0	0	0	0	1	0	0	1
	計	12	13	7	2	2	0	2	38

の傾向は、男子とほぼ同じであり、A・B両グループとも、すべての態度について、単数型の者が大半を占めている。また、変動量の大きさについて、その分布をみたところ、10以下の者が90%以上を占めており、1年間の最大変動量が、男子よりもさらに少ないことがわかる。

(4) 各社会的態度得点の変動の最大レンジ（男女別）

ここでは、すべての学年の組み合わせについての、2時点間の態度得点の変動のレンジのうち、最大のレンジを示す時期がいつかということを検討する。

最大レンジは、必ずしも、ある特定の時期にあらわれるとは限らず、いくつかの時期にあらわれることもありうる。そこで、特定の1つの時期にあらわれる場合を単数型、2つの時期にあらわれる場合を複数型、それ以上のいくつかの時期にあらわれる場合をその他とする。

表15 各社会的態度の最大変動レンジの出現タイプと変動レンジの分布 (Aグループ)

社会的態度	出現タイプ 変動レンジ	性別			性別		
		男子			女子		
		単数型	複数型	その他	単数型	複数型	その他
保守的	0~5	11	7	2	9	6	4
	6~10	17	3	0	18	2	0
	11~52	10	1	0	5	0	0
	計	38	11	2	32	8	4
革新的	0~5	17	4	2	15	3	3
	6~10	11	10	1	16	3	0
	11~52	6	0	0	4	0	0
	計	34	14	3	35	6	3
大衆社会的	0~5	10	2	2	7	5	5
	6~10	18	4	0	18	3	0
	11~52	14	1	0	6	0	0
	計	42	7	2	31	8	5

表16 各社会的態度の最大変動レンジの出現タイプと変動レンジの分布 (Bグループ)

社会的態度	出現タイプ 変動レンジ	性別			性別		
		男子			女子		
		単数型	複数型	その他	単数型	複数型	その他
保守的	0~5	5	6	3	9	4	2
	6~10	9	2	0	17	0	0
	11~52	13	0	0	6	0	0
	計	27	8	3	32	4	2
革新的	0~5	7	6	2	8	4	3
	6~10	11	0	0	16	3	1
	11~52	11	1	0	3	0	0
	計	29	7	2	27	7	4
大衆社会的	0~5	4	3	0	13	3	2
	6~10	12	5	0	15	2	0
	11~52	14	0	0	3	0	0
	計	30	8	0	31	5	2

表15, 表16に示したように, どの態度についても, 単数型が圧倒的に多い。また変動レンジの大きさを3段階に分けてしらべたところ, A・B両グループとも, 複数型およびその他の場合には, 3つの態度とも, 10以下の者がほとんどであるのに対して, 単数型の場合には, 男子は女子よりも11以上の変動を示す者がかなりみられる。

2. 面接調査資料を中心にした分析

ここでは, 最初に, 面接調査の対象者の特徴を質問紙調査の結果に基づいて, 明らかにする。ついで, 質問紙調査と面接調査の結果の関連を検討する。さらに, 社会認識の形成と変容について, 面接調査をもとに考察する。

(1) 被面接者の縦断的調査資料からみた特徴

われわれは, 方法で述べたように, 附属高校Ⅲ年生の中で, 中学2年から高校Ⅱ年までの4回の調査をすべて

表17 被面接者の各社会的態度得点とその群別

被面接者	社会的態度	中2	中3	高I	高II	高Ⅲ	2 3 I II III	
安定群	N・O (♂)	保守的	42	44	40	45	41	◎◎◎◎◎
		革新的	41	42	39	43	41	×××××
		大衆社会的	33	33	36	35	38	◎
	O・T (♂)	保守的	35	32	35	33	32	
		革新的	47	48	47	49	48	
		大衆社会的	30	28	30	29	32	×
変動群	Y・O (♂)	保守的	32	34	34	34	32	
		革新的	42	40	43	43	38	×××××
		大衆社会的	33	27	28	25	28	×××
	O・N (♀)	保守的	36	37	40	40	49	◎◎◎◎◎
		革新的	40	36	35	32	32	×××××
		大衆社会的	47	48	46	47	47	◎◎◎◎◎
H・O (♀)	保守的	32	27	30	31	30	×××××	
	革新的	52	54	50	50	50	◎◎◎◎◎	
	大衆社会的	34	37	41	37	35	◎◎	
変動群	O・I (♂)	保守的	39	24	31	49	32	◎××◎
		革新的	52	57	64	22	53	◎◎◎×◎
		大衆社会的	22	30	25	45	37	××◎◎
	S・O (♂)	保守的	34	19	34	36	35	×
		革新的	48	45	46	52	44	×◎
		大衆社会的	34	22	44	35	35	×◎
M・O (♀)	保守的	33	28	28	24	30	×××××	
	革新的	47	44	48	49	48	◎◎	
	大衆社会的	31	34	37	42	36	×◎	
J・O (♀)	保守的	38	35	28	33	※	◎◎×※	
	革新的	49	49	48	50	※	◎◎◎◎◎	
	大衆社会的	34	29	30	39	※	××◎◎	
T・O (♀)	保守的	33	37	39	39	※	◎◎◎◎	
	革新的	49	49	41	40	※	◎◎××※	
	大衆社会的	31	33	37	39	※	×◎◎◎	

表中◎印はH群を, ×印はL群を, 無印はM群をあらわす。※は当該時期の調査データがないことを意味する。

受けた者を, 被面接者の選択の対象とした。その際, 学年別, 男女別, 態度別に, 態度得点が, 平均から0.5σ以上の場合をH群, 平均から0.5σ以下の場合をL群, 平均から±0.5σのはばに含まれる場合をM群とした。そして, これらの群のうち, どの群に属するかということ調べた。表17には, 被面接者の中学2年から高校Ⅲ年までの各学年における各社会的態度得点と, その群別を, 個人別に示した。

まず, 4年間にわたって変動の少ない, 安定群について述べる。

男子についてみると, 表17より, N・Oは一貫して保守的の態度得点が高く, 革新的の態度得点低いことがわかる。また, O・Tは平均的な社会的態度得点を一貫して示しており, Y・Oは革新的の態度得点が一貫して低い。女子についてみると, O・Nは一貫して大衆社会的の態度得点および保守的の態度得点は高いが, 革新的の態度得点は一貫して低い。H・Oは一貫して革新的の態度得点が高く, 保守的の態度得点低い。このように, 男子3名, 女子2名, 計5名は, 中学2年から高校Ⅱ年までの社会的態度

得点にほとんど変動はみられない。

被面接者の選択は中学2年から高校Ⅱ年までのデータをもとにしているが、高校Ⅲ年の時のデータをみても、それ以前の4年間のデータと異なっていない。つまり、中学2年から高校Ⅲ年まで、社会的態度の変動はほとんどなかったと考えられる。

つぎに、4年間の変動の大きい者、すなわち変動群について述べる。

男子についてみると、○・Ⅰは一貫した傾向を示しておらず、学年ごとに変動のあることがうかがえる。同様に、S・○についても社会的態度得点に一貫した傾向はみられず、変動のあることがわかる。また、女子についてみると、J・○は一貫して革新的態度得点は高いが、保守的 attitude 得点および大衆社会的態度得点は変動している。T・○は保守的 attitude 得点は一貫して高いが、革新的 attitude 得点および大衆社会的態度得点は変動している。

以上述べたように、安定群における4年間のデータは比較的一貫しているのに対して、変動群における4年間のデータはかなり変動している。

なお、J・○とT・○は、高校Ⅲ年の調査時には欠席したため、高校Ⅲ年時のデータはない。

(2) 縦断的調査資料と面接調査資料の照合

1) 縦断的調査資料と社会認識および社会参加の在り方

まず、安定群の結果について述べる。

N・○は大人の社会に対して、一種の未知の世界に対する不安を示したり、汚職や人間関係に対する不満を持っている。また、社会への参加については、「品行方正に……ゴマをすって生きていきたい。それで要領よく生きたい。」としている。社会を漠然とではあるが、ややネガティブにとらえているが、現実自分がそのなかに入る時には、自分の周囲のことに強い関心をもち、如何にうまく現実的に生きていくかという要領主義的、あるいは個人主義的な態度をとっている。これは、彼の高校Ⅲ年時の質問紙の結果とほぼ一致していると考えられる。

○・Tは、大人の社会を「汚い」ととらえているが、同時に、「厳しさ」もそこにみている。しかし、「大学へ行くことばかり考えて……」というように、自分の当面の問題に強い関心を示しており、社会に対する積極的な姿勢はほとんどうかがわれない。大衆社会的態度の傾向がうかがわれる程度で、目立って特徴的な態度はないと思われる。彼の場合は、質問紙の結果と大きなちがいはないと思われる。

Y・○は、大人の社会を「タマエとホンネ」の多い社会として、ネガティブにとらえている。そのため、「大きな体系の中の1人となるよりは、もっと自分の個性を

伸ばせる仕事が良い……」という。彼も、特徴的な態度をとっているとは思えない。

○・Nは、高校生活を「温室」としてとらえ、社会に出ていく不安を持っている。しかし、「地道な生活を求め……（社会に）順応して……、社会の流れにそって、同じ様な生き方をしたい。」とする。彼女は、周囲に対して同調志向的であり、これは、質問紙の結果と一致している。

H・○は、大人の社会を「古い」ものとしてとらえているが、その社会がどうであれ、自分の身近な環境や仕事が自分にあっていればいいと述べて、周囲への同調志向的な態度を示している。これは、大衆社会的態度と内容的に一致する。しかし、質問紙の結果をみると、革新的態度得点が特に一貫して高く、大衆社会的態度得点はそれほどではないことがわかる。このことから、質問紙の結果と面接の結果が一致しているとは考えがたい。

次に、変動群について述べる。

○・Ⅰは、大人の社会について漠然と厳しい面と楽しい面からとらえているが、「万年高校生」か万年大学生でいたいと述べて、社会との関わりを拒否しようという態度を示している。しかし、社会に出たら出世めざして頑張るという割り切った考えを持っている。一方では、革新的態度をも示しており、大衆社会的態度得点および革新的態度得点の高いという質問紙の結果と一致している。

S・○は、「自分を生かしきれない」社会に対して、不満をもちながらも、現実の生活では「自分を適合してやっつけていかなければ……」と考えている。面接結果からは、彼が、大衆社会的態度をもっていることがうかがえる。質問紙の結果と著しい違いはない。

M・○は、大人の社会を虚偽と不正に満ちたものとしてとらえ、その裏返しとして、逸脱した考えへのあこがれを示している。そして、自分と他者との関係の在り方についての自分の考えを、熟をこめて述べている。彼女の物事に対する積極的な姿勢からは、革新的態度がうかがわれ、質問紙の結果と著しく異なるとは考えがたい。

J・○は、大人の社会を、「汚い」、「うそでまらめた社会」、「大人になりたくない」というように、強くネガティブにとらえている。また、一方では、大人の生き方に同情的理解を示しながらも、自分の考え方としては、革新的態度をもちつづけようとする。しかし、現実には、大衆社会的にならざるを得ないだろうと述べている。彼女の高校Ⅲ年時の質問紙の結果はないので、高校Ⅱ年時のデータと比較すると、両方の結果はほぼ一致している。

T・○は、大人の社会については、よくわからないが

社会から疎外された生活や逸脱した生活は、したくないと述べている。このことから、大衆社会的態度の強いことがわかる。彼女についても、高校Ⅱ年時の質問紙の結果と一致していると考えられる。

このようにみえてくると、多くの被面接者は、社会に対して、ネガティブな印象をもち、社会を変えていかなければとか、あるいは何とかしたいという考えをもってることがうかがわれる。しかし、現実の自分の生活を考える時、彼らには、半ば、あきらめを伴って、順応的に生きようとする態度がみられる。

2) 高校Ⅲ年時の価値意識の調査と社会認識および社会参加の在り方

大衆社会的態度得点が高くなるという傾向は、社会的態度の質問紙と並行して行われた田浦研究室の「価値意識を調べる質問紙」の結果からもうかがえる。表18は、被面接者が高校Ⅲ年の時に受けた田浦研究室の価値意識の調査の結果である。田浦研究室の価値意識の調査から選んだ3質問項目は、われわれのいう社会的態度と内容的にはほぼ一致する。

表18 価値意識の調査結果

被面接者		質問項目		
		3	6	13
安定群	N・○ (3)	M	M	I
	○・T (3)	M	M	M
	Y・○ (3)	M	M	M
	○・N (9)	M	M	M
	H・○ (9)	M	M	M
変動群	○・I (3)	M	M	M
	S・○ (3)	M	M	M
	M・○ (9)	M	M	I
	J・○ (9)	※	※	※
	T・○ (9)	※	※	※

注：表中Mは中庸的価値志向を、Iは革新的価値志向をあらわす。※印は表17と同様の意味をあらわす。

表18の結果によると、N・○とM・○が1質問項目ずつ革新的価値志向を示している以外は、すべて中庸的価値志向を示している。この中庸的価値志向とは、われわれの大衆社会的態度とほぼ一致する。それぞれの被面接者の、価値意識の調査の結果と社会認識および社会参加の在り方との関連をしらべてみると、○・T、○・N、H・○および○・I、S・○、M・○については、中庸的価値志向を示している田浦研究室の価値意識の調査の結果と、大衆社会的態度を示している面接の結果は、ほぼ一致した内容を示していると思われる。N・○につ

いては、革新的価値志向を示した1質問項目を除いて、内容的に一致している。Y・○については、この2つの結果の関連を明確に述べることはできない。そしてまた、J・○とT・○については、田浦研究室の価値意識の調査の結果がないので、ここでは言及しない。

3) 高校Ⅲ年時の社会的態度調査と自己認知

われわれは、社会的態度を、保守的、革新的、大衆社会的という3つの態度からとらえてきたが、被面接者はどんな態度をもつ者として自分を認知しているのだろうか。どんな社会的態度をもつかという質問に対する面接結果について述べる。

高校Ⅲ年時における質問紙の結果と自己認知とが、一致している者は、安定群のN・○、○・T、○・NおよびH・○、そして変動群の○・I、S・○、M・○の計7人である。J・○とT・○は高校Ⅲ年時の調査を受けていないので、高校Ⅱ年時の結果を参考にすれば、J・○だけが一致している。T・○は保守的でもないし、革新的でもないとして述べており、社会的態度に関する自己認知は、保守的価値得点の高い質問紙の結果と異なっていると言える。Y・○はやや革新的であると自己認知しており、革新的価値得点の低い質問紙の結果とは異なる。

以上まとめてみると、社会的態度の質問紙の結果と、各被面接者の社会認識および社会参加の在り方、そして社会的態度に関する自己認知とは、関連のあることが明らかである。さらに、社会認識および社会参加の在り方と、各被面接者が中庸的価値志向を示している田浦研究室の価値意識の調査の結果とは、関連のあることが明らかである。

(3) 社会認識の形成と変容

1) 社会認識の形成とその契機

ここでは、社会認識がいつ頃はっきりしてきたのか、そして、そのきっかけはどんなことがらであったのかという質問に対する面接結果について述べる。

まず、安定群についてみると、社会認識がはっきりしてきたのは、N・○および○・Nは中学2年、○・Tは中学の終り頃、そしてH・○は中学3年であったと述べている。一方、Y・○は、徐々に社会認識ができてきたので、時期については、特にあげていない。社会認識の形成の契機については、N・○は公害と核の問題をあげ、○・Tは公害に対する関心を、そして○・Nは自分の進路を決めたことをあげている。Y・○とH・○は、その契機について、自分でははっきりしていないと述べている。

変動群についてみると、○・Iは小学校3年頃であるが、J・○は中学3年、S・○は高校Ⅱ年、M・○は高校Ⅲ年に、社会認識がはっきりしてきたという。T・○

は知らないうちに社会認識がはっきりしてきたので、時期については、自分ではよくわからないと述べている。社会認識がはっきりしてきた契機について、J・○は倫理社会の授業で先生から新聞を読むように促されたことを、M・○は真剣に将来のことを考えるようになったことをあげている。○・Iをはじめ、S・○、T・○の3人は、その契機についてはっきりしていない。

このように、はっきりした社会認識をもつようになった契機としては、進路の問題、社会的な問題(公害および核)、授業を通しての教師の影響などがあげられる。これらの要因については、社会認識の変容に影響を及ぼす要因と関係があると思われるので、以下の項で論ずることとする。

2) 社会認識の変容とその要因

ここでは、おもに、社会認識に変化があったかどうか、そして、もし変化があったとすればその要因は何かという質問に対する面接結果について述べる。

安定群では、はっきりした社会認識をもってからは、その社会認識に変化がなかったと答えた者は、○・Tと○・Nの2人である。一方、社会認識に変化があったと答えた者は、男子のN・○、Y・○、と女子のH・○の3人である。そのうち、N・○は高校進学を契機とする高校1年頃に、Y・○は広島原爆記念堂を見たり、倉田百三の「出家とその弟子」を読んだりした高校の初めに、H・○はロッキード汚職事件のあった高校Ⅱ年に社会認識に変化があったと答えている。

変動についてみると、面接で、社会認識に変化がなかったと答えた者は、男子のS・○と女子のJ・○の2人である。また、社会認識に変化があったと述べた者は、男子の○・Iと女子のM・○およびT・○の3人である。○・Iは中学に入って社会認識は変わり、さらに将来のこと(大学進学問題)を真剣に考えるようになった高校Ⅱ年の終り頃にも社会認識の変化があったと述べている。また、M・○は高校Ⅲ年の時に父親と進路の問題で話し合い、自分の社会認識の甘さを指摘されて「打ちのめされ」、自分の社会認識に疑問をもったと述べている。そして、友人とのつきあいを通して、社会の見方は変わってきたという。T・○は社会についての、はっきりした自分の考えはないので、社会の見方はよく変わると述べている。つまり、自己の社会認識を自覚的にとらえていない。

つぎに、社会認識に変化をもたらした要因について検討すると、まず第1に、進路に関係した問題がある。受験問題、大学の選択、将来の方向がその内容として含まれており、真剣に自分の将来を考えることが、社会認識の変容に重要な意味をもつと考えられる。つまり、自分

の将来は、ある程度、社会の価値観、道徳観、社会体制などの社会条件に依存しており、新たに社会をとらえ直す1つの契機になる。N・○、○・IそしてM・○がこの例である。

つぎに、今まで家族に依存してきた彼らにとって、次第に家族から独立するように努めているこの時期には、友人や先生の果す役割もかなり大きいといえる。学校環境、友人関係も社会認識の変化を促す要因と考えられよう。例えば、○・Iは自分の学校を急進的だととらえており、その学校環境に影響を受けたと述べている。

さらに、彼らは、知識や感情が豊かになり、論理的な思考が発達していく。そして、そのような発達に基づいて、親や教師を観察し、甘えたり対決したりするものである。ことに、物事に対して必ずしも十分な認識をもつことができない彼らにとって、物事に対する大人の態度は、わかりきった態度をとっているとしか受けとめられない。そこで、そのような態度に反発を感じ、対決しようとすることになる。しかし、彼らは、感情が先走りがちになり、論理的な説明や理解ができなくなって、大人との対決に敗れたという挫折感をもつことが多い。例えば、M・○は、自分の進路について父親と話し合い、そこで、「打ちのめされ」、自分は何を考えればいいのかと述べている。このような対人関係のなかで、どのような体験をもち、その体験をどのように受けとめるかということも、社会認識に影響を及ぼす要因の1つと考えられる。

また、書物やある事物にふれるというような、特殊な個人的体験も1つの要因となり得る。Y・○は、広島原爆記念堂を見て感銘を受けたこと、倉田百三の「出家とその弟子」を読んで感動したことなどが、社会認識に変化をもたらしたと述べている。

面接を通して得られたデータをもとにして考えてみると、社会認識の変容に影響をもつ要因として、さらにもう一つ、マスメディアにとり上げられる社会的事象がある。これには、将来の人類の存亡にかかわる公害問題、核問題、食糧、人口問題などをはじめ、世論を反映する政治的問題、汚職問題などが含まれる。われわれが社会の出来事、社会的問題などの情報に接するのは、マスメディアを通してである。そのマスメディアにセンセーションにとり上げられる問題を通して、われわれは、社会の流れや方向、さらには自分の将来までも考えていく。N・○やH・○が述べている、公害、核、ロッキード事件といった社会的問題は、社会についてのイメージや社会認識を形成する上で、重要な要因になっていると思われる。

ここでは、社会認識の形成と変容に効果をもつと考え

られるいくつかの要因について検討したが、これらの要因は、相互に複雑な関連をもっている。意識するにせよ、しないにせよ、現代社会に生きている彼らにとって、自分の問題を考えることに連らなっている。自分の生き方について、真剣に考えなければならない時期にさしかかっている彼らは、自己の生き方を次第にはっきりさせていく。と同時に、社会認識および社会への参加の様態をはっきりさせていくことになる。

IV 討 論

1. 縦断的調査結果に関する討論

まず、縦断的調査から明らかになったことをまとめてみると、つぎのとおりである。

(1) 革新的態度の態度得点は、ほかの2つの態度得点よりも高い傾向がある(表3, 表4)。

(2) 大衆社会的態度得点は、学年が進むにつれて高くなる傾向があり、とくに男子において目立っている(表3, 表4)。

(3) 大衆社会的態度の相関は、男女とも高く、女子の場合には、ほかの2つの相関も高い(表5, 表6)。

(4) 各社会的態度の変動は、男女とも、平均および、変動量の分布から判断すると、変動の小さいことがわかる(表7から表10)。とくに、この傾向は女子において著しい。

このように、縦断的調査資料の分析結果によれば、中学生および高校生の社会的態度は、保守的、革新的および大衆社会的態度の中では、革新的態度の態度得点が、ほかの2つの態度得点よりも高いこと、また、3つの態度はすべて、全般に変動が小さいこと、そして、大衆社会的態度については、とくに男子の場合に、学年が進むにつれて大衆社会的な方向への変化がみられることなどが明らかにされた。

このような結果は、全体としては、前回までの報告(久世・速水, 1975)とほとんど同じであり、全般に社会的態度の変動が少ないという、今までの指摘に合致している。

ところで、このような全体の傾向の中で、男子において、大衆社会的な方向への変化がみられるという結果を得たことは注目すべきである。前回までの結果では、3つの社会的態度はすべて、ほとんど変動しないということであったが、調査回数を重ね、同一被験者のデータが数多く蓄積されるにつれて、徐々に一定の傾向が見出されるようになったと考えてよいであろう。つまり、前回まで縦断的資料として取り扱ったものは、1年間の間隔で2回の調査を受けた、5グループのデータである。したがって、中学から高校にかけての社会的態度の発達過

程の様相をみたとしても、それは、各グループの結果をつなぎ合わせたものにすぎなかった。それに対して、今回の報告では、同一被験者についての4回分のデータを報告している。

この点を考慮して、個人の変容過程を分析してみると、個人によって、また態度によって、態度得点の変動時期や変動の大きさに、かなりのちがいがみられることがわかる。このような新しい知見は、今後の分析の手がかりとなるであろう。

われわれは、中学生および高校生の社会的態度は、中学生の頃にはすでに革新的態度を獲得し、維持していくこと、そして、男子では、高校生になるとさまざまな社会的事象に遭遇するために、各社会的態度を新たに変容し、構造化につとめるものもいるだろうということ、などを指摘した(久世・速水, 1975)。今回の結果は、この指摘を概ね支持するものである。しかし、上で指摘したような新しい知見も得られている。社会的態度の変容過程にみられる個人的要因を明らかにすること、あるいは、中学から高校にかけての変化に関係する要因を探ることなどは、質問紙調査だけでは十分把握できない問題である。これらの問題を解明するために、今回は面接調査も行なったが、今後は、発達過程の横相を明らかにするための、縦断的調査によるデータの蓄積とともに、面接調査などを含めた多面的な探究が必要となろう。

2. 面接調査結果に関する討論

面接調査の結果からは、次のことが明らかにされた。

(1) 面接から得られた社会認識、社会参加のあり方などの結果に基づく社会的態度の様相と、縦断的調査資料による社会的態度調査、および高校Ⅲ年時の価値意識の調査の結果は、ある程度関連のあることが示唆される。

(2) 自己の社会的態度についての認知と、高校Ⅲ年時の社会的態度の調査の結果には、かなりの一致がみられる。また、高校Ⅲ年時の価値意識の調査の結果によると、被面接者の多くが中庸的価値志向であることがわかる。

(3) 社会認識のはっきりしてきた時期については、中学生の頃というのが多いが、小学生頃、高校生になってから、あるいは、次第にはっきりしてきたので時期的に決められないというのもある。また、社会認識の変化については、縦断的調査資料から得た安定群と変動群との間に、著しいちがいはみられない。

(4) 社会認識の形成や変容に効果をもつと考えられる要因として、進学・進路問題、学校環境、友人関係、政治的・社会的問題、個人の体験などが指摘される。

以上のように、面接調査から得られた結果と、高校Ⅲ年時の社会的態度の調査の結果および価値意識の調査の

結果には、ある程度関連がみられる。しかし、面接記録を詳細にみると、被面接者の社会認識と社会参加の在り方には、かなりのズレがみられるようである。つまり、それは、意識・認知面と行動面との間にズレがあることをうかがわせる。面接記録によれば、彼らは大人の社会を、「汚い」、「うその多い」世界というように、ネガティブなものとしてみており、「大人になりたくない」「万年高校生でいたい」などと、社会に対して拒否的な態度をもっている。しかし、将来自分が社会に出る時の姿を考える時には、現実的になり、周囲のことに強い関心を持ち、いかにうまく生きていくかという要領主義的な態度を示している。いわば、「片隅の幸福」型とでも呼ぶことができ、このような態度は、われわれの大衆社会的態度と軌を一にするものである。とくに、被面接者の社会的態度に関する自己認知が、質問紙の結果とほぼ一致していることを考えると、彼らは、日常は意識面で自分をとらえているのではないかと思われる。そして、現実の生活を考える時には、ものわりのいい現実的な考えへと傾斜してしまうのであろう。

つぎに、面接調査実施に際しての技術的な問題点について述べる。

まず、社会認識の変容を確認する場合に、過去を回想させる方法をとったが、その方法が適切であったかどうかの検討が必要である。過去を振り返らせさせることは、当然のことながら、現在の立場や状況を通して、過去をみるわけであるから、現在が過去に反映することになる。このことが、社会認識の変容についてみる時に、縦断的調査資料による安定群と変動群との間で明確な差異を示すことができなかつた要因の1つになっているのであろう。

もう1つの問題は、被面接者を選択する際のサンプリングの問題である。われわれは、社会的態度が比較的安定している群と変動している群を選ぶ基準として、2つの基準を設けた。その1つは、3つの社会的態度の変動量である。もう1つの基準としては、各態度得点に基づいてH、M、Lの3群にわけ、4回の得点が個人ごとにどの群に属するかを求めて、4回のうち何回ほかの群へ移動したかという回数を求めた。しかし、2つの基準を同時に、しかも3つの社会的態度を一括して扱うことに問題は残らないだろうか。被面接者を片寄りになく選択する目的で上の2つの基準を設けたのであるが、面接調査において、社会的態度の安定群と変動群の間にちがいはほとんどみられない。したがって、被面接者によっては、3つの社会的態度が同じ程度に意味をもつのではなく、特定の社会的態度が重要な意味をもっているとも考えられる。その点を考慮すると、安定群と変動群を選ぶため

には、さらに別の基準からのサンプリングが必要であったとも言えよう。

3. 総括討論

ここ4、5年の間、中学生・高校生の社会的態度に関する研究を継続しており、今回は、4年間にわたる縦断的調査資料と、はじめての試みである面接調査の結果を報告した。

縦断的調査資料によれば、中学生・高校生の社会的態度は、革新的態度得点が保守的 attitude 得点および大衆社会的態度得点にくらべ高いことがわかる。この結果は、今回の資料においては、男女ともに、また、AグループおよびBグループの分析結果ともにみられる傾向である。さらに、この結果は、すでに検討した2度にわたる報告（久世・速水、1974、久世・速水、1975）においても、明らかに同様な傾向がみられている。したがって、この分析結果は、附属中学および高校と同種の中学および高校においても、同じようにみられる現象であろう。このような結果が得られているのは、民主主義をたてまえとする社会状況はもちろんのこと、学校教育、とりわけ、社会科教育においても、この民主主義的な理念を育成し、涵養していることと関連があるものと思われる。

つぎに、縦断的調査資料によれば、すでにふれたように、中学から高校にかけて、男女ともに、また、Aグループ、Bグループともに、大衆社会的態度が増してきている。調査項目は、周囲への同調と他人指向性、疎外された結果としての政治的無関心、小市民的態度などの特徴を把握できるよう工夫されている。このような、いわゆる大衆社会的態度が、高校生ごろになると徐々に芽ばえてきている。一方、面接調査資料によれば、これもまたすでにふれたように、大人の社会をどのようにみているかを問うと、高校Ⅲ年生の被面接者は、「汚い社会」「上下関係のはっきりした社会だ」「タテマエとホンネのあるところだ」「つかみどころのない泥沼のような世界だ」「世間体を気にするところだ」などと形式的操作に基づいた思考方法により、社会の不合理な一面を鋭く指摘する。ところが、将来、このような社会とどのようにかかわりたいかを問うと、彼らは、現実の社会に適応し、迎合し、その中に自己を埋没させようとする者が意外に多い。「品行方正にゴマをすって生きていきたい」といった現実迎合的な生活態度である。このような生き方、生活態度は大衆社会的な態度と通ずるものがある。また、田浦研究室による価値意識に関する調査結果も、中庸的価値志向を示す者が多い。

このようにみえてくると、縦断的調査資料、面接資料および田浦研究室による価値意識の調査のいずれにおいて

も、高校生では、大衆社会的な傾向を徐々に示すものと理解してよかろう。

また、縦断的調査資料によれば、中学生・高校生の社会的態度の変容は、全般的にみて、あまりないように思われる。とくに、女子においては、各社会的態度間の相関係数はかなり安定しており、学年間にみられる変動量も、男子にくらべると僅かである。このように女子では、社会的態度の変容はあまりみられていないが、このことは、児童期後半から思春期にかけて、ある種の態度が形成され、それが持続し続けているものなのか、あるいは、中学生・高校生のころまでには中核的な自己を支える態度は形成されておらず、むしろ、高校以後に、性役割などの問題と関連して、ある種の態度が形成されていくのか、必ずしも明らかでない。この種の検討が今後必要となる。男子においては、革新的態度得点がBグループでは若干低くなる傾向がみられており、女子にくらべると、多少、社会的態度は変動している。このような変動の要因は、面接資料によれば、進学・進路問題、学校環境、友人関係、政治・社会的問題、個人的体験など、さまざまな要因が指摘されている。このような個人ごとの態度変容の要因は、今後、さらに面接などを通して一層明らかにしていかなければならない課題である。

しかしながら、中学生・高校生の生活環境をみると、彼らは、好むと好まざるとにかかわらず、現実の受験体制の中に組みこまれているのが現状であろう。中学校や高等学校普通課程の教育条件は、進路指導とくに進学問題に焦点がおかれ、中学生や高校生の一般的関心は進学問題にむけられがちになる。

このような生活状況を想定するとき、中学生や高校生の社会認識や社会的態度の変容などに関する事象は、彼らの中核的な問題とはなりえず、しかも、これらの問題とかわる時間的余裕も極めて乏しいものと思われる。

われわれは、縦断的調査資料と面接調査により、中学生および高校生の社会的態度に関する研究を行ってきた。われわれは、質問紙調査法の宿命ともいえる無操作的な対応関係に基づいて、社会的態度の変容過程の分析を指している。ここで得られるデータは、中学校や高校普通課程のかなり平均的な学校を代表しているのであろう。後期中等教育の現状は、大学入試の予備的な性格を示しがちな高校普通課程と産業界の要求する人材養成の場となりがちな高校職業課程に二分される。この二種類の高校では、進路選択、人生選択の諸契機もかなり異なることが予想される。このように考えてくると、われわれの社会的態度に関する研究は、高校職業課程の生徒をも対象とする巾広いものであることが必要となる。これらのデータが蓄積され、比較検討されていくなれば、青年期の社会的態度に関する予測や理論は、一段と進むことが期待される。現実には、高校卒業を境として、モラトリアムを享受する一群の青年とその恩恵に浴さない高卒就職者の一群がいる。青年心理研究の課題は、これら二つの青年期を予測し理解することであろう。

文 献

- 久世敏雄・速水敏彦 1974 中学生・高校生の社会的態度に関する研究(1) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 21, 1-11。
- 久世敏雄・速水敏彦 1975 中学生・高校生の社会的態度に関する研究(II) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 22, 13-24。
- 斉藤 勉 1974 中学・高校生の価値意識の検討—名古屋大学附属中学校・高等学校の事例を中心にして—名古屋大学教育学部紀要(教育学科), 20, 135-146。

中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅲ）

この調査は社会や学校や家庭などに対するみなさんの考え方や態度について調べるものです。現代の中学生や高校生が一般的にどのような考え方をしているのかをみるのが目的ですから、思ったまま卒直に答えて下さい。

名古屋大学教育学部教育原論研究室
発達心理学研究室

〔中学・高校〕〔男・女〕 （あてはまる方を○で囲んで下さい）

_____年 _____組 _____番

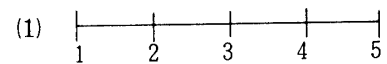
調 査 A

1 (やり方)

次の39のそれぞれの考え方や態度について、あなたが実際にどう考えているかを 1 非常に賛成 2 賛成 3 賛成とも反対ともいえない 4 反対 5 非常に反対 のうちから1つ選んで○印をつけて下さい。

非 賛 な 対 賛 反 非
常 成 い と 成 反 常
に 成 も と 成 反 に
賛 成 い も 対 対 反
成 成 え 反 対 対

(1) 国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい



(2) 個人の自由は尊重すべきである



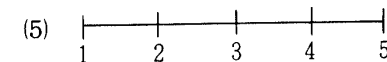
(3) 流行語などはよく知っていないとはずかしい



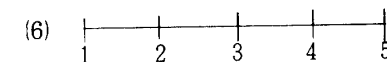
(4) 女が政治などに口だしすべきでない



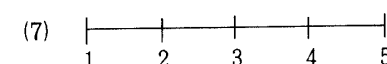
(5) 正しいことであれば世間体など気にすべきでない



(6) 労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない

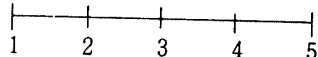


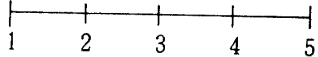
(7) 結婚は家柄を重んじなければならない

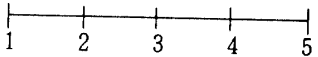


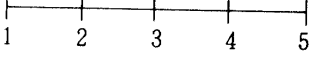
非常に賛成 賛成 ないともいえない 賛成とも反対 反対 非常に反対

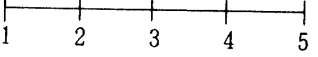
- (8) いくら恩義のある人でも筋道のとおらない頼みごとは断った方がよい

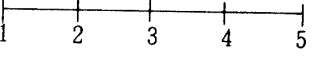
(8) 
- (9) みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする

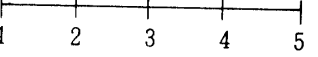
(9) 
- (10) 伝統や習慣は尊重すべきである

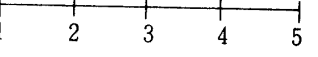
(10) 
- (11) 社会のために正しいことであるなら親の反対をおきいても行動すべきである

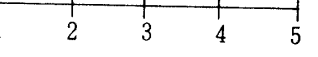
(11) 
- (12) 国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない

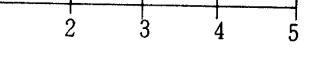
(12) 
- (13) 世間をわたるには義理や人情が最も大切である

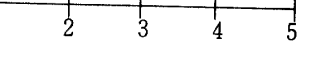
(13) 
- (14) いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである

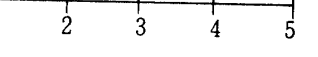
(14) 
- (15) 中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい

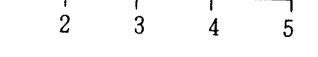
(15) 
- (16) 長男が家をつぐのは当然だ

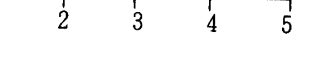
(16) 
- (17) デモやストをするのは労働者の当然の権利である

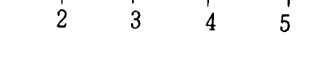
(17) 
- (18) 理論よりフィーリングやムードが大切である。

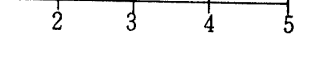
(18) 
- (19) 親孝行は子どもの義務である

(19) 
- (20) 先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する

(20) 
- (21) 誰が衆議員の選挙で当選しようと日本の政治はかわらないと思う

(21) 
- (22) 目上の人にはもっと敬語を使った方がよい

(22) 
- (23) 男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない

(23) 

中学生・高校生の社会的態度に関する研究（Ⅲ）

		非常 に賛成	賛 成	な い と も い え	賛 成 と も 反 対	反 対	非常 に反 対
(24)	今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい	1	2	3	4	5	
(25)	学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである	1	2	3	4	5	
(26)	政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである	1	2	3	4	5	
(27)	共同募金や歳末助け合い運動があるとなるべくさけるようにする	1	2	3	4	5	
(28)	世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない	1	2	3	4	5	
(29)	家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである	1	2	3	4	5	
(30)	ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどろだ	1	2	3	4	5	
(31)	日本は天皇を中心にまとまるべきである	1	2	3	4	5	
(32)	「方角が悪い」などということはまったく信用しない	1	2	3	4	5	
(33)	いつの世でもお金がなければ幸福にはなれない	1	2	3	4	5	
(34)	デモやストでさわぐのは民主国家の恥である	1	2	3	4	5	
(35)	結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい	1	2	3	4	5	
(36)	皆と同じような持物や服装をしていないとひきめを感じる	1	2	3	4	5	
(37)	家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい	1	2	3	4	5	
(38)	家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである	1	2	3	4	5	
(39)	公害問題は被害者と加害者だけの問題である	1	2	3	4	5	

A STUDY OF SOCIAL ATTITUDES OF THE ADOLESCENTS (III)

Toshio KUZE, Motomichi GOTO, Shuji MIYAZAWA, Katsumi NINOMIYA,
Hirokazu IKEDA, Yoshimi ITO and Keiko ISHIGURO

How are the social attitudes of adolescents formed? In the literature of adolescent psychology, we can seldom find studies concerning the developmental processes of social attitudes.

To investigate the developmental processes of social attitudes of adolescents, it is required to analyze the longitudinal material obtained from the same subjects. We have undertaken such a study. In this study, we intend to examine the longitudinal data over four years. The social attitudes, for the present study, are conceptualized as conservative, radical and mass-social attitudes. The results derived from the longitudinal data are complemented by interview with some subjects.

The purposes of this study are to indicate what the facts of social attitudes are, whether or not the social attitudes change during the lower and upper secondary school days, if they change, which of them change, and what factors make social attitudes change.

The longitudinal data are obtained by administering a questionnaire to the same subjects once a year, totally four times. The subjects are boys and girls in the attached upper and lower secondary school of Nagoya University. The data analyzed here are a part of a larger set of data we have already collected. The data analyzed are those of the groups which are given the same questionnaire four times from first grade of lower secondary school through first grade of the upper and from third grade of the lower through third grade of the upper. The research was carried out in the school years 1972 through 1976. The number of the subjects is shown in Table 1.

The interviewees were chosen from boys and girls of third grade in the attached upper and lower secondary school. They have been given the questionnaire four times since second grade of the lower secondary school. Ten boys and girls were selected from among those whose attitudes did not fluctuate but either changed to a certain degree or were stable. The interviewers were 7 graduate students in the department of educational psychology of Nagoya University. The interview was carried out toward the end of January, 1977 at the attached upper secondary school.

The results obtained are the following:

A. The results based on the analysis of the longitudinal data:

- 1) The mean scores of radical scale are higher than those of other two scales (Table 3 and 4).
- 2) The mean scores of mass-social scale tend to be higher with increasing age, especially in boys (Table 3 and 4).
- 3) The inter-occasion correlation coefficients for mass-social scale are significantly high in boys and girls. In girls, those for the other two scales, conservative and radical, are also significantly high (Table 5 and 6).
- 4) The fluctuation of each attitude score is small in boys and girls, judging from the mean scores and the distributions of variation scores. Girls show still smaller fluctuation (Table 7, 8, 9 and 10).

B. The results based on the data by interview:

1) The subjects' understandings of the adults' world and their ideas of social participation obtained by interview seem to be related to the results of both the longitudinal research for social attitudes and the questionnaire of values obtained at third grade of the upper secondary school.

2) Most of the subjects answered that it was in the lower secondary school days that they make clear their understanding of the adults' world.

3) As the effective factors for understanding the adults' world and changing the contents of their understanding, subjects referred to educational and vocational choices, school environments, peer relations, political and social problems, and personal experiences.